枇杷園類題叢句集 下

へ 5
4653
2

門へ5
號 4653
卷 2

昭和六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

七夕　古里にしるよりあり星まつる
大隈や板川をとる星乃書
竹ヶ川や芝ゐやすく波る星の夕

見渡のさゝあゝ
天の川　天の川紀の古もみるふ市村
七種の乙ゝ淋よかるを天の川
河まの川見立ほやをよりなるゝ
乙ゝきゆる言葉中より天乃川

舟行

一桙子ふる漕つもよりの川
水あのよ鳥もりのあまの川
ふ苔子むりへく来ふ金れ月

盆月

寿き茶ふけ高ほるまてて亀茶

亀茶

角力

蕨り根乃小家より一ほ角力さ

露

世よつりりる人ようやまれ茶

都貢り百ち贈徐英

ふ天り才ようけ也ぬ新け茶

居寿ハ西茶よなほ小庵ぶ

素分法ゆりむりの迦陵れ

ふ子ぬもく坊いつる

人へ丹波れ寿何法師

花清の紀風なり

白露子ふりあつめる坊ひぶ

檀渓

茶ふ音あり雑住なもく茶の烟

山弓や梅子拾ふる仏乃茶

浮車一字

霧

秋霧の関至よりて車うの車
出るかの乃分よりてなしし雁の海
秋きりや絵けをちつく物化多
深林子雁なきる衣明ぶ

稲妻

いな妻や絵よもしき庭の雪
山と居もは笑ふる海の上
舟うり上りて

秋風

稲妻ふ爪つく波ひ法こぶ
あき風や舞うり毋へり弱

秋風子物地桶形に月表ぶ
須磨寺を戸を閉ぎ秋ど風

蜘蛛

蜘風れあきもし生義の月
門ぎ言や雨上ひ巧丈ひ風
秋蚊やに風ち茅木乃者なし
あき風の作映寺ゆる提の事
山ひあや月よこ丈つく秋ひ風
悼松兄
むつまきうきを四年ひ

中ちの　つきましこの　此松見ハ
みすてまつるかきをひしく
年の歌もいとをかく　老を捨ぬ
先ちつまきなしひるふか
それをけきハなりをや
新風やれり　空なる　表れ鶴

木槿

むしーをうや　をかき　木槿ハ　花一ツ

朝皃

ゑのやくを　蕣のさく　垣根ぶ
朝さう　朝皃なし　新ぶ

いく〳〵　花の世を　朝皃の　書乃枝
敢屋こしを　朝皃こうる　旅森ぶ

朝皃ハうこくよ　人の　訪ふ度ハ
きくしさやを　知蕣の　花一ツ
あさ〳〵　毎ハ小車ハ　花の上

蕣花

蕣花
蕣ハなく　日の　淋しさハ　蕣の　花
殘りなく　咲ちこそ　女郎花
ををなく　しを　都を　れ　ぬ名こそ
やきくし　花　古人ハ　白ひぶ

蘭

萩

萩もさく浮世のうちにあくもうるる
房萩やまもひ持つる縄もるる
のそくまて物うらし萩のゆくゑ
ゆきい花よりとくまきゆ小庭ゆ

一句井

もも枝もてちゆるも落ちり萩芒
萩よ志ゆももるくまにゆる西ゆ

野秀亭萩見

萩の雨ちりは葉て萩のあ

秋の面や河のうちまて萩のも

小俳庵にて

萩ふるや塀ゆ面の大りしき
山里や物もゆ萩の門
萩よ立ハり物さけ来る西の葺
人ゆやあるさ物ゆ萩乃原
萩せ、房の朝夕ゆくしし
虹の粕や雲りまし乃萩の多
こゆもとゆ老ゆるものよ萩ゆ雲

秋蝶　蝶のてふ回し木陰を飛ぶ多

蛩　蛩むしの小路や小町の髮結ふ

蛩　きりぎりすやいつまでも瓜の花

蛩　鳴く夜のあらしを鳴くきりぎりす

蛩　なくは悲しし鳴くは寂しし　蛩

蛩　死後の枕上るむしはまんと

蛩　いひくるる丈和歌の墓所哉

蛩　泣く

虫　掘り集て虫もちらちら塚の茶

庭雅は庵前の芝つまくを

なくさめんと蛩をかりふつ

掘り来て口の采庵よりたれば

小くく鳴く虫なり

虫　虫は多夜もすがら虫は鳴せむる

むし　鳴やあり戸の向うの雪乃花

蠶馬　蠶馬や海のはもうつくしき

八月　八月や海のはもうつくしき

八朔　朔馬や地は八朔の里　壹

頭巾の月

ありてなきかの月夜を柴の烟ぞ

二月　不破まてらさしの日のうれし二月

林間

萩丈やとこしもとり二月

三月　三月や小さい花宿の春坊主

三月ちいさきはなその名残り

初月夜　山里やりふ能ひかり月夜

五日月

多武峯の萩よめきをや初月夜

翁桂五

初月まなるまて偽き松ぼう房

今日月　翁代や山のうくいすりふの月

三月ぼうくまてるりめりふの月

常梅亭

面をあけうく山月ぶ宗みち

茶と授しうく加園を思ふ

ぶりひらかつ堂の友とちこれ

あらひけりこゝもとすゝぐ
なりさまはを宵れ風流
海山のけしき畫しく
主人へれ雅情平たるよ
仕ふ

花雪を枕とゝ恋ふ乃月

名月

名月とゝふ物ゝ宵月夜ぶ

良夜清光

名月よ雲の流れる毛ふ

月見

月見とゝり八幾ゝ小橋ぶ

贈伯先四十賀

西月

ゝ代ゝ坂路乃ゝ平ゝ
雪もれ花もれ月ひゝり八
ゝたしゝ

月秋

ゝ年ゝ人ゝ月れ秋
中秋ゝ一夕雪月ゝ
ゝく十五夜ゝ雨ゝ
降風味ゝ

ちもとてちらしてきと揚屋

紫雲 降り雨をふらめてしかも青

雨の日伝濃みり人と言うて

嬉敷を雨よりめをうつの月

月まもるうちうつも雨形芝ゞ

基自寺

雨月 雨ちしや月もあもり警如雨

降らす月やゆ陰をれ毒の陰

ちしらあて月を雨物小庵ゞ

須磨

ひち笠雨は降おうれち

あやしき中家をしらうて

海人の家ら神ちうら夜月の雨

あしゝゆうんちる晩

波ちまれ煙ち月は名物ゞ

明石にて

月こうてうの俗ゝ清盛盃

山家と言う月はゝしき

月

折しも夕ゆハさやくも露て
主出て此夜ハ絲麻に神
ちらし来まなしとしつさ
侍ともまた心しあるらよかなるそ
給ふことを枝とおもし給ふ
枝あけてもそられねもう萩と月
巣燕が黄土をとむひこのむし
乃まとふをとらし　傍ホ一室
なるに居して睡為か埴ふ

あ亭蘭鳥ゞ栖なる里
曉そりつもてたちより月夜のれ
り數つく枝おもしろき月夜かな
世の末の家が庭に生のひと
枝くしるきこえ扇ハふかし
さよなりてまた霜のつもら
松くれなゐや月をそてすゝみける
雨晴山月高
海山を洗ひあけたる月夜かな

年記亭

春もまさる月の影なる菴うれ
享和壬戌七月既望 杉兵
木犀屋より送る出中の浪花の
魯隠あるを東坡の赤壁乃賦を
きゝて歌をわる伊魚蝦の
三字を得て
魚と水の心とを自ものゝ形ぐ
杉間よりをこしうる月餅

とゝまりとゝまりて
子供ふよりもまさる月れを
畫讃
海老を答ふ 伸れ揉も自然ぐ
雨後
月てらや水のうの孤の形
呉弁ひらひらうおうう身ぐ
うちうちの月や杉う根 蕭れ上
とゝまりとゝは是たゝむう月れを

寺々千年をへたる月を見
ひやくしやくの月をまつ多ある木のるぶ
白岡寺
幽々千里や老れ寐覚手に出る月
富山寺
雪よ降て衣打ちる月板れ
秋暮れて一るの白老人
目覚やまくら老とせしつや月ち入
熊河寺

月の夜ハ河まておても坊ちしし
云ふ寺ハ是は獨ぶしや寄月板
松代寺雪よりも青し月の豆
秋の夜ハ明てもおしし月板ぶ
十六夜
いさよふ月ふて居き月の上ノ口
十六夜や月まなりの蓮の多
井戸田寺
十六夜もとくく月ふる寺ぶ
いさよひや浜の紙燭して休の奥

八月十六日瓢会といふことを

十六夜の月はまだうす瓢かな

十六夜は月見ともたなすゝ小雨かな

十六宵雨

彼岸

藪寺の鳴子豆まく彼岸かな

芙蓉

月宵〳〵芙蓉はなほ〳〵花の影

薄

陽炎の秋まもあつう花すゝき

唯多ト断つて舟かるゝきぶ

蟬蛄の鳴方を亟もくきぶ

芒よりおてまはほのもくきゝ系

雨の星ゆはれまん芒ぶ

都すゝ

法華のもくきを待る雨夜り南

旅人乃水よ呼ゆ芒ゆなな

雨はやむ夕潮江のもくきぶ

稲花

礁

湖の水のひくさよ稲乃花

小夜まぶ冥の東ハ蒼し

夕月は舟よきこゆ砧ぶ

友風亭

秋はなのあしらひとて桔梗
とりどりの黄色なる中
老母茶はを書くとしをと
ゆくとよりを交て野色の
雪色とうるとくとく月花瓶
ゆ活こう砧の裏句せよりと
ゆきまれうりつゆ秋はを
ゆく雨よ降て夜の氣色

もいとさびつてうえうれハ
萩をこえ芒をこえて老きぬる
小松ぬき月は鶴も雲やはく
小松ぬき伊勢ものを佳人多可新
我多よ坊きれて新さる鶴うれ
多られて又さいり鶴ゆかりうり
多行や鶴の多れ行萩の多
しき三や影うるほうの音北雲

初雁

湖の音初雁とまてなりよ音を

鶴
鴨

雁

三河乃国樋堂を行かね
小舟引き棹さしこぎ矢矧川
北下流よあさふ
きの屋北おのう空四方多等や
浦辺北ア浦る下を早こぎり
丁等や月新きさく北よ義を
かなしきもやを等て丁等河田ら
乃ものを鳥のもしる等田ら
十ら北萩吹しきて丁乃ものを

あきぞ栄ものあきも本きり丁の多
雁無ものをみねのおる川原ら
子東ら東武まゆく北
高浦とりふ子後まを
美ら来ものく
丁北多四しし義て多きり
童謡
屋しく竿よかれあきの丁
先へなるき先乃丁あくるも

[illegible]

小鳥渡

鹿

[illegible]

山[illegible]

鹿老[illegible]

[illegible]

鳴果て[illegible]

鹿鳴やふ山の菊家二ツ　三ツ

羅城寺小集通題

鳴花をはなたとくん[illegible]身枝

言閑山寂[illegible]

あ[illegible]

門[illegible]

秋[illegible]山お藻和田の屋[illegible]

[illegible]

鳴鹿[illegible]

鹿の言や[illegible]を月乃[illegible]

朝風や鹿追ひし老ぼ多
夢の山やしきぬるしまの荒の声
金華山を岐阜中納言の
墓ぬ少しくうめく突瓦として
鳥道姫うくく鬱くとしく
崖蒐ちう
しやとて路白き麻を掌の松
賀
秋千歳毛白き荒のあゆく心

稲刈
素山子
稲こくや刈やや田よ葉ち夕煙
老の方の作りかしまかしき
おもしろきくまりてかしぶ
雪子
秋かぜや多よ落ちう鳴子ぶ
引捨て屋敷よ結ふなりふ弐
歌
ち麻弓て久しき野く一うれ
唐桑
庵きひの垣中ふ自妙砂の雨
菊
葉いつまと忘きて心定まり勢
寛中九日

旅人より一枝くれよと菓の花

公事乃ちとてとてとてとてとて菊菓子

動くるまよ才ら老らもぬ菊花

菊菓子雨菊

月と菓子乳まるやうせしる梅屋

贈花舞帰故々

父母をうるさしさよ菓の花

ちら菓子山路ひもれぬも菊や

訪菊庵

うしやまうしまつ菓もつくぬ庵乃庵

奥ち朝人八陽者くきくの花

菊ちる丸園子幕紙

いしてて

花毎ひ菓ちもひ丸ち八幸庵

菓の書や砌まくくつく書の形

信ふや菓畑ち屋ちまよ菓花

花き丸くくいちくくまる菊ちし

ち桶や書ま英菊を一ひくく

秀をしらるや菓子屋の職の形
菊は香やなぐめらる牛乃真
きくのうやや秋せ〳〵しる豆のつる

蓬門

菊の色しらるる忘きり菓の門

梅

少月色ふかし菓ハ人乃
深切よ花多し
ちる雪ていや菴の菓子屋

半閑舎を山を額ふあて
水を脚ふよ踏てたつうの
杉間を月をうつる出る
月を杉はふるを菊月ハ
月を月てうえ来ふことよひの
月紙もまとまつふ栖
なうう

後月

半ちるおふ中あり後の月
後の月源ちう人は物書

梅いろ好き四十三人七月見ぶ

十三夜竹亭

後の夜を蕎やくさくや月の雲

鶏冠のうけをや月に十三夜

瀧山寺おくふかさ岱岳の

別荘十八ろ

紅葉

紅葉して唐土柚味噌の白しぶ

帰り来ぬ水み茂しくるふぶ

日暮て五老峯よいろれも

夜ひとり紅葉なしてなしとも

紅葉を席上ろうろ敷し

なきは新田川を紙子若と

ひるとうる許ろ風ふる

仙ろよしうかき紅葉宝

つき行く

一家内、芳白かくやちる紅葉

平齋ろ紅葉ろ浪玉の

麦をれ芋 月勝 秋田乃

偶風ふき落れてちりしかやや
山ゐ詰よ落ちる
海山ちんそ[illegible]ふし　やうり　ケトち
さ〻川やそ[illegible]ふ　紅葉
柿　赤柿のちそれハちらぬ朝ゆゝ
菜蔓　山　菜蔓よつて落ちる小雨ゝ
松茸　松茸よ松茸ゝ落乃竹ハ細し
矢矧ふ
尾花　ちりやや蜂と尾花の枯ゐ茎

秋萩　淋しさてやゝ夕色の萩哉
郊の映を
芒ちふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻夕郭
秋山　松て久しき松ゝ〻れ蜂の巣
ゆ活つり鳴きりし秋の山
秋水　琴鴨ハ毛衣深ゝ〻ゝ〻の水
葛三本訪琵琶園通歌
秋ゝ木　ちゝりゝ〻ゝ蛙ゝの宴ひゝ〻
秋暮　ゐ〻ゝる山ハ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

よる月の出やしとまりて秋の雲
杉年や杉よりつたはあきの雲
白れ雲夢ゆらかられしも秋の雲
小こるきい畠遠なりなまけ
秋ちとそのこ家と夕の車
見ぬ水ともあきちゆ
芝やとかくものなし秋の夕

秋夕

秋声

川風や舟もまもる秋ふる
秋聲ふる高ゆて

秋西

俳句もとし里ことなれ秋の西
こちもう浦ゆて
秋れ西ちくるの日を入る
豆ひるる高れしやあきの西

秋の西

ちる芦ほしちる秋八ちりを

秋暮

秋れ夜や月望ふりる法面

秋

ものとしてく人をもて次の秋
秋もそや自ふちちハ嵐ふ
悼如東賜筆板

蜻蛉

蜻蛉の人は秋とて遠てり

蜻蛉のナヲ斗り枝枝を

蜻蛉は水にあつく忘れまし

宮こにハあきれ蜻蛉は就もて

紀貫之亭通歌

秋宮

淋しさは蜻蛉なる枝もなく

とうもうもや秋宮は外に

長寒

枸杞は実乃こぼれて寒れやる

り秋

り秋は秋はりとなりてあるなる

り蜻蛉やむしを地わかりの名

秋名残

名残惜き秋やあるまし西は

冬之部

初時雨

きりしぐれ降ぬ雲ぞ冬ふかぬ

かりがねとくる冬ハ来よりて初時雨

鳴海潟しぐるる初かり菅蘭の弦

家たくれもとをよ妙り寒き初時雨

しぐるるやはい小車は花乃上

一雲ニ初ちしぐれ次ケ明石

朱系彩

さく作よぞやしぐる作しぐれ

新居や古人となれし小夜の月
山茶花をとりけるに、時雨
降り出でぬ
水仙や寒咲き花の一ツ咲き
芭蕉忌
世を捨て人の名残や月と花
大ゆかた月と花とを時雨
ぬるるや書けばあるべきまで
しらぬ世にいくしも経る石筵の月

月遅し待ちよりのいとしらぬ
仲唐
淋しさ月となりまさるわが時雨
茶室迎古
家ゆかしさやの時雨の書のうけ
秋しらぬ小雞後なれ白しぶ
送百川を民帰奥州
なるあまもみなし立ち
人れまさるつるまき旅乃

[illegible]

[illegible]

友菓居のるしまへいてさきふ

ありしよ若鮒をしくて

[illegible]も素[illegible]ものをもまして読め空

白居老人と悼む

[illegible]のくに[illegible]みよ法[illegible]ふし[illegible]れば

[illegible]ゆるれ彩法[illegible]

霜

しらきり杉や柏も楓乃も

赤しらきハよ地よさうり蔦ふ

萱草を[illegible]住吉阿ふ賜ら

[illegible]風雅をとゝもん時雨れ神[illegible]ふ

夕しぐれもゝやゝ山家れ小石塩

書[illegible]ら[illegible]やしを鶯れ笑[illegible]

杉伝寺里やしぐれ乃移[illegible]

玉埜里

[illegible]玉[illegible]食廉乃里れ故

義河ら富を問ひて
是こそ世に名高の田舟と言の宮
夢雨蒼々集含れ東西
凡堂 ちくらの命終はりし
古来しらぬ八興さきとる
いにしへふる白ちかしその
東は桑会長墓は俳諧也
今は白市は海ふと都よあり
かなし方遠しして登りしを

然くやも
あまて海の人と雲東れて浦雲と
離々の
まてしるき海色を雲の苔木ば
物語乃さまを孤こる関小
ゆく
きしも嶋大も雲東は山也
思ふ遠
刺力てさりこちら雲東ら

木枯

木がらしや けさいふえる 冬の鴨

風や 海一すじに 冬の月

木がらしに 吹や竹木も こえぬ日

木枯や 吹止 鳴子やしきぶ

小春星

こがらしや 物ものすごく 雪ふる宿

木枯や 雲いろいろに 冬ふる 篠ふる

梅 向うの二句

ちらちらと 白もみぢの 木がらしに ふる苔の上

おもしろや 日ぐれ 雪ふる こがらし

ちり葉きん 方をあらしに 雪ふる

冬ふる 雪 木がらし ふる

なのはし 少しよ 雪の 雪ふる

冬ふる

冬ふる 雪 木がらし ふる

物中より 柿一色に 冬ふる

木がらしや 冬ふる 柿 冬ふる 柿の上

不破に関して

冬ふる 雪 冬ふる 冬ふる

木瓜の実を路おしうゑ置橘
大和の国をゆかしく
畝火の山いつこ耳成山八
雲をそ分て行くる水
乃ちうと呼うけてのうく
ものかはんのうくうの四もと
動しうけと笑ともるまき
なりは

はしらしく山を蔦楓
紅葉なれとは紅葉なき
ちりとはこそ言はして事葉なて
ひもも若んはちそ衣を八重なとく
葉の中も一木ちる蔦楓
はちそもそ軒ゝ平しう事屋ゝ
逢坂や山もはちそ蔦の葉自和
梅葉ゝ化亭ゝく
ちりさや事懐を化のそ

新桔梗

桔梗

訪野雀

桔梗や地をはふ西の菴の犬

詩仙堂帰路

丈山のまもりかなり桔梗ぞ

[illegible]

枯尾花

[illegible]

蘭屋にて

尾花[illegible]鐘[illegible]乃冥

大魚退作

[illegible]

[illegible]和[illegible]

[illegible]

枇杷園[illegible]三人四人

[illegible]

なをは目をとゝのる奥さま

[illegible]

蕪根汁といひたるを煮て

酒肴

しらをとりてなしこま

臭成身めりとしてあり

[illegible]

蕪根汁柴や夏花を刈初る

冬枯　冬ゝれの泥をあらはしもとゝれ

冬ゝをや板戸よりむ朝ぼれ

冬枯や蹄よ立笠ゝ[illegible]

菜花　菜の花に行れ書ゝ[illegible]て来

菜の花の花の枝を三ヶ月乃白ひび

帰花　帰花一ヶ[illegible]ゝ[illegible]

枯芦　ゝゝのおろ芦に枯茶ゞ

大根引　丈山を訪ふ　大根引

待雪　ゝゝ[illegible]や寺き庵の松

雪や雪ハ三ヶ月雪ル山の上

そゝ雪や人ハ[illegible]ル桂　笠

初雪

都ハ焼土を見めぐる

人くの家ハ雪をつまく三ヶ

一ツもたゝす石ムロ雪あく

枝ゝ葉色ひゝ蕾こゝ

ちゝ雪乃都ゝもる　板ヶ

初雪ゝ雪ハ[illegible]の[illegible]

恵比須講　枝ゝ[illegible]ル裏須講

寒さ　人雪ハ郷ゝ[illegible]

雪ゝ[illegible]

星ハのゝ[illegible]

葉君波伝

舟唐人月ハ[illegible]也　寒さ

裏傷

星のゝ[illegible]ル板ゝ[illegible]

[illegible]ゝ雪あゝ綱代ゝ[illegible]ル里ひゝ

綱代ち

綱代守波ゝ山乃　六ゝ[illegible]

三河にて

千鳥

生駒嵐千鳥神の、きさよ 時千鳥
二おや子鳥きこえる山乃きれ
朝 夜さのゝ鳥きゝなるいとはゞ
身代や千鳥待乃れ 磯まりり
ちりふしハ巣とつくる千鳥ゞ
柿ちや 義のうちもちく子鳥
千鳥 法ゝ中よ 吾めしれ 法
ふしつけ 蛸 つけや人も巣 ハ主 蓮

水鳥

水鳥や ちゝく 動く人れ 鶏
水鳥れ ワれ 子 子 保 森ゞ
廣 深や 子 鴨なく 是のうけ

鴨

五道亭

鴨れ ちけ 松 芦 宿ゞ
家 楊や 子て 鴨の 鴨の 彩
木 川 て

鴨 北 よ 舟 家 け 早 漕ゞ
炭 彩 主人 二 歌 を 主人

ぶらうを袖にして東武を
倶しひしらをらの壁上に
盥て空房をまもりしむ
きもや主人帰て来らん
花を鴨の多のくもうら瓢
大佛もて
湖を鴨て埋うら夜明の邦
家あてらきうる多生涯哉

生海氣

鱈　炭

蓋もうら高氣しも物のこうら
鱈舟やはしりつ進うら枝の雪
素富の雪をもうい姿
峯の雪宇治は炭舟ちうう
夕ゝ水や炭こはしうう門の茶
伊賀伊勢の雪畑を結ふう炭
雪を白浪の際ようもうる白髮ぶ
毎ゝ雪あり衾ようさうる綿衣
方をはうむをしや衾のあうしや山

衾

紙子　古里にてくく夜うつなり古紙子

冬籠　冬こもり鳥も冬ハぬいのられ

冬籠　大黒ハ物をもやひうり

薪ゆこうちよりもとる松もあり　冬籠

冬木立　こうちすくいきし一ぱい二ぱいや　冬木立

冬木立　冬木立　載の志ゝ山志ゝ松もも

芭蕉翁　百回忌　千句

芭蕉

ちなこよりる　その　是なり　冬木立

雪

市川白猿　死りぬと志城

より　支ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

白猿死して冬木立ゝ成る

知多ゝ屋敷もゝ鉛市ゝ雪保し

雪ゝ雪ゝ雪の雪山ゝ雪ゝ

丙寅　十二月　朔日　雪　一日

一句井

うゝ雪や雪ゝ雪ゝの笠の丈

水ゝ雪し雪と分入屋乃徊

高といへの中より梢ありて鈴の音
月雪花夜を[illegible]風清ぶ
曙やあらしを雪は堪もくく
月の雪のおくうくゆの移
降雪はあやみくゆるあらしさ
雪雪居はあを雪休雪の
ゆくまをいつまでハ三井
寺の雪ゑむて湖上雪しと
さきやき

新しい姿の雪うもこの雪のうりゆう
雪のあるもの雪の降とてはうもの
一句井桂裏追悼
降雪はしくも物のこゝ綾ぶ
雪ゆゑもて馬は堅雪陣れ
夕ゆれのごとく里や雪寄しぶ
月雪やこゝひ月を雪の内
老ゆゝしゆゝふ終は人雪はゆゑ
降雪の三井寺をいつも身枕ぶ

暁更こゝやこゝ為て伏しめつと
雪て徳ふ
雪こ寒を植て枯ふちきりれ
一句 井 雪見
人も云とこゝ乃雪も鶏こけ
雪見 茶 茶情 強て成り市利
日の落る方り西なり雪の原
さりても雪を降なり乗山家
中支 掃や家あるく事 鳴雀

面白のこゝき世や雪の馬車
萩 山買 ちおん 唐の雪
守武 風
霰
玉裏まて寄 妙なる細工 那
こゝ〳〵と年 の座妙る雲さ
氷柱
り れ 新 氷柱こゝは玉の多
勝山を 舟 下せは 茂仲
こゝまして りを見 風
あゝ雪 降て雪ち

はるを待て徹底

ちる波はなけてはあるる小垂ぐ

夢氷ちりやや小柳の花の君

冬至梅　庵の家八号伊勢人上冬至梅

葱　小武郎ちまく鴨もこ夫根原畑

木兎　木兎や回しまてあてはまる

京

蝶　蝶坊や光くつ多減者生ル

春蝶も春をや鳴くん苔ノ雨

冬月　あくまても冬ちむ冬ル月

さまくと苔ふ冬冬の月夜ぐ

やくく冬光く第ち冬乃月

冬の月ちちをみる人もちを

玉帚ち春妹を坊ちゆ春ハ

月ハ雪ふき鳴ちく雪し

きもちもこちちしきこちく

ちれてちをひふたてる夢乃

ちをりちはりてその雪の

池形工事とし先づ

杉よりゆり出る冬の月夜哉

まゝこと降あゝ雪や冬の月

火桶

抱き桶富士の煙や通ふらん

月まして志賀は隠きく火桶哉

行ずゝや松ゐる火桶のあてきり

火燵

寄て果しあれり雪もこたつ哉

河豚

ふく汁ゝ雪ゝ寒きは諸の浮世哉

冬

ふゝしよい全てはあるを言よ雑

冬日

冬のゆや蒜苗て雪火影法師

馬上吟

冬のゆ杉くゝしや石詰山

冬夜

冬の夜や絵そ又ふ沖の多

冬月夜ら

冬月夜ら雪ゝ降り小家哉

冬雲

柳雪のあ夜りよひぬ冬の雲

冬雨

水音の聴雨上雪て姫申は雨

顔見世

梨子柿を雪ゝ降ゝ新見せよ

寒月

寒月ふよ雪のちらゝ哉

山里に夏はなほ寒き夕暮ぐ
れ火焚くけふは足袋さして女うれ
夜雨を聞く外面うち叩
夜雨
あらしも吾きし寒竟の友とたちたき
かな義川や西こきこるる柳叩
義川
蔵うけやみもり多ふちちく武
御色はふるめてりぬきち角き
神たちきちうきこまるふしさや
ちく掃やを重のうつに鳴くく夜
掃

野秀亭

しもきさや始の多こる蔵の月
ちちと見ち
多見より先くちちる眼白が
吹さハく寄や之ちちの岩の松
年忘
月雪や人ちいちくれ見れ
早梅
梅ちちと之あくし年の梅
歳暮
重日も留ちしちち居の冬
り年
しゆくや雪と四隅ちう先桂

年暮

り年ゝとなりもぜゝ山家ゞ
蛛ゝ乃こゝろもゝ
年ゝとしもやゝ小雪ゝり
雪ゝ月ゝ市上よりて来ゝ歳
戒異ゝ
やゝしゝかゝぬ松ゝゝ角ゝの竹ゝ
梅ゝくゝとゝゝれゝもゝ一ゝ
花月一雙のゝゝゝゝゝの
ゝゝも既ゝゝ待ゝゝとゝ

ゝゝ一瓢の酒の残ゝ
朱ゝゝ

瓢單丁餘地ゝゝ年ゝ
年丙辰 ゝゝ

書延

松

雜之部

月花を捨てこそ松は書けなり

頼多松亭松

月雪よりくるかハ男一木の事

大黒殿

花ゝ實ゝ四ゝ枝ゝ

竹

ゝゝ徒ゝかこき世の果て

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

石河大夫六十賀

鶴

大空に隈なき月のかげのようにうん

亀

亀のうへに乗りつるかの仙ひと

山清き映山亭にて

路

もろなく空ゆく雁やく雁の

倉作

富士

今日もこえぬ見えぬ雲の石二乃山

九月十六日 吉田 玉有 也

自ものの間ふ郭の石二竹山

懐古

無題

懐古やたちぬ止まる見の口

芳花の馮月の四十の賀よ

ふる山茶き八人の孤しき

大日本國郡全圖

彩色摺箱入　全二冊

此六十余州の全図八小八国の大業に志めるを人をして地の理を知らしめ武
蔵鎌倉の窓廻国順拝の人々勝槩古跡を探り神社佛閣をんど残る所なく
必用の書なり切語その国々の城下郡縣村落山河ふくるまで盡く彩色を
あて一覽するに易からしむ実に東路翁が積年の工夫と仕て如新大成なるも
古今地図の書の冠るものなり此形見て知べし

尾陽名古屋本町七丁目　永樂屋東四郎
東都　京橋南傳馬町二丁目　同　出店